

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

東方溶炎録

【作者名】

kk1

【あらすじ】

車にひかれた主人公が東方の世界へ転生?!!!

初めてかくssなので大目に見てやってください
下に主人公のプロフィールを書いておきます

*ネタばれになるかも

主人公（転生後）プロフィール

種族・妖怪 性別 女

髪・赤

腰辺りまでのびてる

顔は美人系

体系

胸・・CかDぐらい

身長・・165

能力

溶岩を操る程度の能力

設定などが増えたらつけたいです

1話 転生と出会い

目を開けるとそこは……

「真っ暗だ」

ちよつと待てえつと……

俺は確か、朝目覚ましが、ならなくて、柔道の強化合宿の集合に遅れて、車に轢かれたんだよな……

てっことはココ死後の世界？

「そつか……俺死んだんだな」

「そうじゃ死んだらな、飲み込みがはやくて助かる」

「だよな、あんだだけ、おもつきりぶつかったらなー……てっ誰だよ」

なぜか初老のじいさんが後ろにたっていた(ダンブルドアみたいの)

「うん？ワシか？神じゃ」

「えっ？まじで？」

「まじまじ、で急に何じゃが、お前には転生してもらっつ」

「へー、なぜゆえに？」

「実は、お前が死んだ原因、わしじゃ」

「まさか、寿命の前に死んじゃったパターンですか」

「わしの手違いじゃ」

「・・・まー仕方ないですね、」

「あれ？怒るかと、思ったんじゃが」

「あきらめが肝心ですよ」

「でじゃ、あと30秒もしたら転生するんじゃが」

「急だな!!」

「あきらめが肝心じゃろ？」

「ちょ、まてなんかしたが開い、うわーーーー」

「お前さんの、種族妖怪だからの」

「覚えてろよーくそじじいー」

「さて、ダクソの12週目でもやるかな」

そして俺は落ちながら意識を手放した

とある火山の火口

なぜか、俺は赤い液体の中にいた

そういえば、あの神様？は、俺の種族妖怪とか言ってたな。
今体が作られた後かな？手足の感覚あるし、大丈夫だろ
とりあえず、ここから出るか

「ぶはっ　　うわー煮えたぎってるな」

出たこととで気付いた、今までいた赤い液体は溶岩だった

「よくあんなとこに居て丈夫だったな」

そう言っって体を見て見る

和服を着ている・・・なぜか女物の、そしてなぜか膨らんでいた・・・
そして股を触ってみると、そこにあるはずのものが「無かった」。

r z

「ええー!!なんですか!?!なんなんですか?!また神様の手違いですかあああああああ!!!」

少女の叫びが山に消えていくのであった

となんだかんだあり

現在、自分が生まれた？山を去り7〜8キロ離れたところで迷子になっっていた

その後、落ち着いて体を見て見たけど、・・・髪が赤色で、腰までのびてるし

なかなか、胸も大きい・・・いや、べ、べつに変なことは考えてないよ！

後話し方を、女言葉にしました

後腕とか、細いの普通に岩とか叩いたら、簡単に割れちゃった
これから、人に力加減に気をつけないと、握手で手を潰すとかいや
だからね

「うー 1111ど1111なのさ もう夜だし」

と言いながらしばらく歩いていくと

自分より大きな猫がいました、しかもこっち向いて涎垂らしてるし
「お前つまそっつ」 あんなことも言ってるよー

・・・ピンチじゃね？

やばいどうしよう、はわわわ

あっそっつだ自分妖怪だし妖怪っていえば助かるかも

「あ、あの、わ、私妖怪でした、食べれないよ」

「そんなことは、関係ねえおいらは、腹が減ってるんだい」「じゅるり

「ど、どどうしよう、転生初日に、ゲームオーバー!？」

そんなこと関係ありませんでした

くそおおお!!

そっつだ！逃げよう

「あ、「指をさす

」っん?」「指したほうへ向く

「サラダバー!!」

即座に逃げ出した

さあ地獄の追いかけてこの始まりだ

「ぎゃあああああ」

「食わせる」

「いいいやああだあああああ」

あの猫？木をなぎ倒しながら来てる!!!

「あっ！あんなところに川が」

「じじや」

バシャーン

と音を立てて川の中に飛び込んだ

「くそお 水の中に逃げたか」

「ふーあきらめたか」

「何してるの？」

「え!？」

後ろを向くとかわいらしいツインテールの女の子が泳いでいた

「盟友?・・・じゃないね妖怪かな？」

「え、えっと、とりあえず上に上がって話さない？」

「うん」

猫は、うんいないね

「えっと、上がったことだし自己紹介からしよう私は河童の河城 美香(かわしろ みか)」

「私はたぶん妖怪、種族はわからないけど名前はの火口 纏(かぐち まとこ)」

「火口さ」纏でいいですよ「じゃあ纏よろしくね」

「河城」私も名前がいいよ「美香さんよろしくお願いします」

それにしても、美香さん水中にいた時、顔しか見えなかったけど、河童という割に

水かきもついてないし、なんかリュック、持ってるし私が思ってた、河童のイメージと違うな

ぐづうううう

「／／／」

あ、そういえば山から下りてから、何も食べてない。

「えっと、私の家すぐ近くだから来る？ 食べ物とかあるし」

「す、すみません ．／／／」

河城家

河城家

現在、私は河城家内にいる。

どうしてこうなったか、大まかに言うと

誕生 山を出る 迷子 猫らしきモノに襲われる 川に逃げ込む

河童（河城さん）に会う とりあえずご飯をもらえることになった（今ここ）

「えっと、すみません、突然おじやまして、しかもご飯までもらっちゃって」

「いいよ、いいよ 誘ったのこっちだし、それと、なんで、あんな下級の妖獣に襲われていたんだい、見たところ、纏はかなり妖力持ってるし、」

「妖力？」

「え!? 纏、妖力がわからないのかい?!

「生まれたばかりなもんで」

「生まれたばかりなの!? そうは見えなかったんだけどなー、生まれたばかりでその量か・・・（妖力の使い方を知らないまま放っておいたらいつか、力に吞まれて暴走してしまうかもしれないし）……………よし、ここで会ったのも、何かの縁だ、君に妖力の使い方を教えてあげるよ、少しは自衛できないと困るでしょ」

「……………」

確かに自衛ができないと困る。それに、このチャンスを逃したら、いつ覚えれるかわからないし、もうあんなのに、追いかけて回られたくないしな

よし！決めた。

「はい、こちらからも、よろしくお願いします」

「よし決まり 今日のもう遅いから明日からやるう、教えてる間は、ここに泊まってね」

「いいんですか！」

「そうだよ、ここに居る間、家事とか手伝ってもらっけどいい？」

「はい！もちろん大丈夫です」

「じゃあ、もうお風呂入って寝ちゃおう、明日は早いよー」

「頑張ります」

そして、私は美香さんに用意してもらった、布団の中で最初一日を終えた

次の日

鳥の声が聞こえ、目を覚ました

「はあ、これは夢じゃないんだね」

昨日の夜、もしかしたら、これは夢で目を覚ますと、いつもの世界に戻ってるんじゃないかと期待したが見事に、その希望は打ち碎かれた

「仕方ない、神様に言ったじゃないか、あきらめが肝心だって」

自分に言い聞かせて寝室を出て

「あ、おはよう、もう起きたの？よく寝れた？」

「うん、おはよう、御蔭さまで、よく寝れました」

「なら、よかった。今から朝食にするから、運んでくれない？」

「これを運べばいいんですね」

「うん、そうだよ　ご飯食べ終わったら、妖力の使い方を教えるからね」

「はい」

少女達食事中・・・

「「うちはそこをま（です）」

「よし、そろそろしますか」

「はい...」

と言って、美香さんの後を追う外に出た
私はかなりわくわくしていた。

転生といえば小説とかでよくある、チートが来るんじゃないかと、しかも美香さんが言うには私の中にある妖力という、なにかが多いらしいし、どんなのが来るんだろと妄想していると

「ん？どっしたの急に、こやにやして」

「はっ！いや、なんでもないです」

「ふーん、じゃあ、まず妖力やほかの力について話そう」

少女説明中・・・

説明を受けた結果わかったのは、まず妖力は、妖獣・妖怪などの特有の力らしい。たまに、人間の中にも長生きしたものは妖力を手に入っていたりするらしい

次に、霊力(*)はおもに人間などの生物が持つてる生命エネルギーらしい、人間の中に、これを多く持って生まれてくることがあり、そのほとんどが神社などの巫女だとか何とか、次に神力は、ヒトなどの、信仰心から生まれる力らしい、例えば、人間でいえば人から信仰され続けると、その信仰されてた人間が、現人神となりその力を使える用意なるらしい

これを聞いてて、なんか人間ずるくね？と思ってしまった、自分は人間には戻れないと実感した

「説明は、終わったし。次は実習行ってみよう」

「おー」

「まず、手をだして、そして手のひらに力を集めると・・・」

すると美香さんの光の弾が出てきた

「す、すーい」

「これで驚いていられるのは、初めだけだよ、とりあえずやってみよ
「う」

美香さんが目の前で実演してくれた通りにすると手のひらに突然、
光の弾が出てきた

「い、いじですか」

「おー、ちゃんと出来てるじゃないか、妖力をとりあえず体内から出す
「とはできるみたいだし、・・・空を飛んでみよう!!」

「へ？」

美香さんが、急に私をつかみ、空に連れて行った

「え！何これ!?!と、飛んでる?」

「よし・・・ここまで連れてこれば大丈夫かな?」

ふと下を見て見ると・・・わーさっきまでいた、家があんなにちっ
ちやーい・・・下には川があり、その横には大きかった家がすでに、こ
ぶしほどの大きさになっていた

「今から落とすから、頑張って飛びなよ?飛べなくても下は川がある

から安心してね。じゃあ、行ってらっしゃーい」

そんな無慈悲な！

「じゃあ――――」